

経済サキヨミ塾



荻原博史 元野村證券アナリスト。年金、分業、保険、家計など各分野に強く、メディアで活躍中。

まもなく始まる争奪戦。世界を動かす水ビジネスに注目

異常気象で砂漠化や地下水の枯渇が起り、21世紀中には世界中で水が不足して激しい争奪戦が起きるといわれています。美しい山と水に恵まれた四季のある国、日本では、冬の雪解け水が川に流れ込んで農業用水となり、梅雨が稲や野菜を育てます。ところが今、この日本古来からの姿も地球温暖化など異常気象で変わってしまうといわれています。地球の温度が上がることで積雪量が減り、十分な雪水が河川に流れず、水不足になると心配されているのです。それでもまだ、日本は天然水の宝庫で極端な水不足に襲われていませんが、世界的に見ればこの異常気象と人口の爆発的な増大で、水量が減って砂漠化が進み、地下水が枯渇する状況が続いています。

3人に1人が水ストレスに

国連の調べによると、洗濯、トイレ、入浴、飲料などで十分に水が使えないために水ストレスを感じている人は、地球上に約7億人もいるそうです(06年)。これが地球規模で起る水不足により、25年には人口の3分の2が水ストレスに晒されると予想されています。また、ユニセフと世界保健機関(WHO)の報告によると、今、世界の8人に1人が安全な水を飲める状況にないといわれています。なぜこうしたことが起きているのかというと、今から400年ほど前は5億5000万人ほどだった世界の人口が今や60億人を突破し、さらに増え続けているからです。そうなるに当然ながら食糧問題が

心配されますが、実はこれも水の問題と密接につながっています。以前、本誌で取材したこともある丸紅経済研究所の柴田明夫所長によると、インドでは湯水のように地下水を使って農作物を作ってきたために、過剰に水を汲み上げて地下水が枯渇寸前になっているといわれています。中国でも40年前までは11万本しかなかった華北平原の井戸が200万本まで増え、そのために地下水の水位が1〜1.5mも下がっているそうです。また、アメリカでも、地球最大規模の水瓶といわれるオガララ帯水層の平均地下水水位が30年で30フィートも下がり、砂漠化が進んでいます。

こうした状況に対し、オバマ政権は水タスクチームを編成し、国を挙げて水問題への取り組みを始めました。国連テクニカルアドバイザーの吉村和就氏によると、まさに、21世紀は限られた水をめぐり争いで、誰が主導権を握るのかということが重要になり、すでにその戦いの火蓋は切って落とされているのだそうです。例えば、IT界のガリバーこと、IBMの動きもそのひとつ。09年3月には水ビジネスへの参入を宣言し世界中をあっと言わせました。IBMはすでに05年に、看板事業のパソコン部門を中国のレノボに売却し世界中で話題となりました。が、彼らが考えたのは、これからハードで勝負しても儲からないということ。ハードはいち早く中

国など途上国に売り払って、自分たちはもつと効率よく稼げるソフトで勝負をしようと考えたのです。そのためにも、水ビジネスへの参入によりこれまで積み上げてきたコンピューターによる情報管理のノウハウに磨きをかけようという狙いがあるようです。

これは水資源をコンピューターで管理するという新しいビジネスで、具体的には水源地、配水管、貯水設備、河川、港湾のデータを世界的に集めて、集めた膨大なデータをニーズに合わせて加工し、商売につなげようとしています。そのために、水の監視システムを作り、各国の気象状況や環境情報などあらゆる情報を駆使したソフトの開発に力を注いでいるのです。

世界を牛耳る水メジャー

水資源管理のためのIT市場は、5年以内に約2兆円の市場に急成長するといわれています。それを視野に入れて、IBMは地球規模で起る水争奪戦に備え、力を蓄えているといったところでしょう。ただこの莫大な水市場を狙っているのはIBMだけではありません。現在、世界の水市場には、3つの「水メジャー」が存在しています。フランスのヴェリア社、GDFスエズ社、イギリスのテムズ・ウォーター社、この3社が、世界の上下水道の整備や施設の維持管理などの8割を占めていて、すでに莫大な利益を上げています。

また、世界にはまだ上下水道が完備されていない国が数多くありますが、途上国では今後40兆円規模の整備が見込まれています。一方、先進国でも上下水道の老朽化対策で、今後110兆円の市場が生まれてくるといわれています。さらに、世界のお金持ちといえばアラブ諸国ですが、アラブ各国では今、砂漠を緑地化するならどれだけお金をかけてもいいと考えています。つまり、水ビジネスには途方もない宝が眠っているのです。そんな中で日本はどうするのか、気になるところですが、現状ではまだまだのんびりしている状況です。というのも、日本に住んでいると、水は天からの授かり物で、苦勞せずとも簡単に手に入ります。しかも、上下水道の普及率は世界一で、蛇口をひねれば、飲み水が出てくるのが当たり前。恵まれすぎていて逆に有り難みがわからなくなっているのも事実。海水を真水に濾過する技術などでは日本が独走していますが、どうも下請けの一番手となっているようで、肝心の儲けは水メジャーなどにさらわれてしまっています。安全な水を確保するのに必死な世界の国々と比べて、安定供給が当たり前の日本。不況脱出のためにも、今こそ、世界に目を向けて「水」で新しいビジネスチャンスを開拓すべきではないでしょうか?

